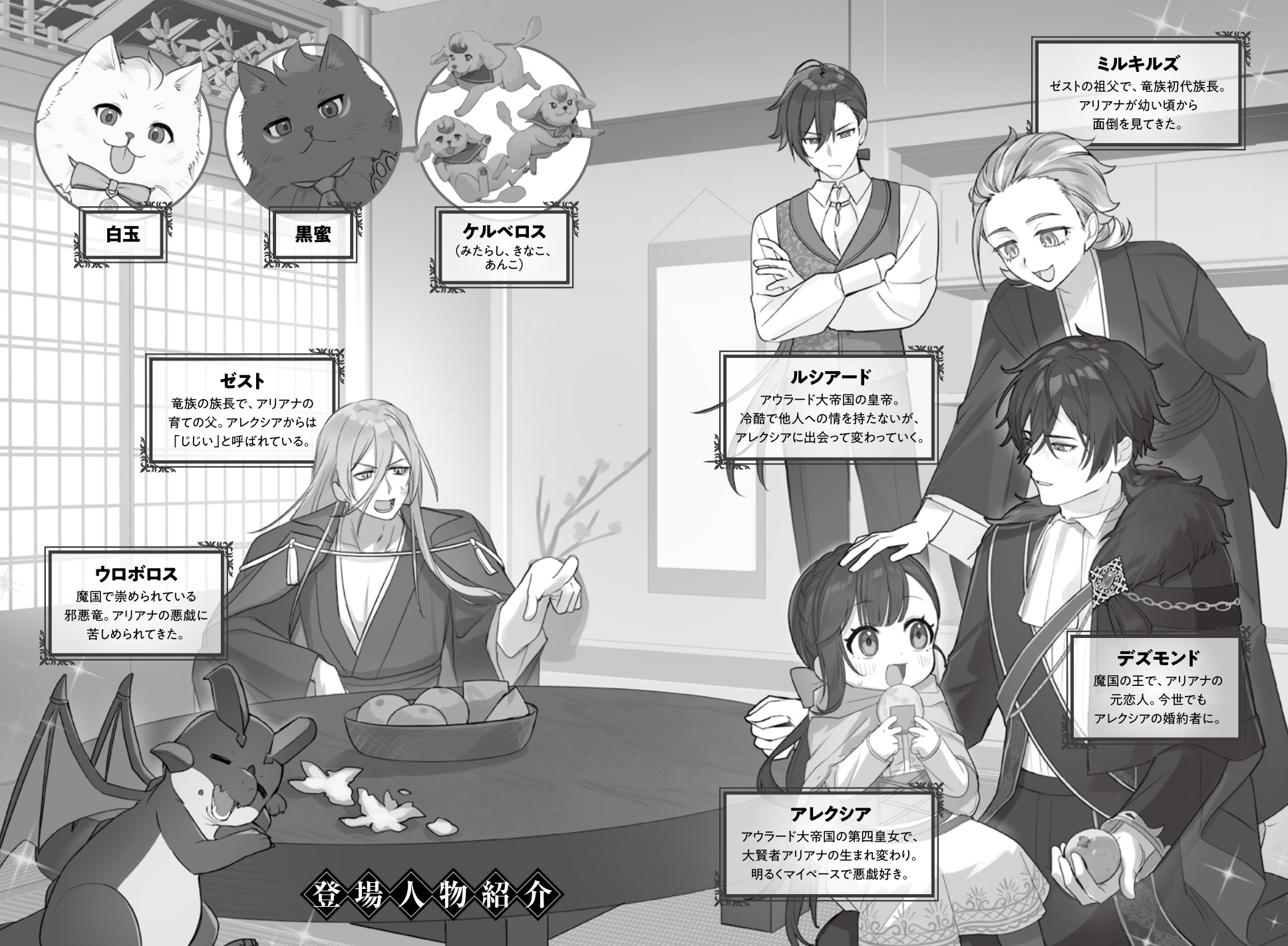
転生皇女は夢は冒険者です！

冷酷皇帝陛下に溺愛されるが

3

akechi

Illustrator
柴崎ありすけ


白玉
黒蜜
ケルベロス
（みたらし、きなこ、あんこ）
ミルキルズ
ゼストの祖父で、竜族初代族長。アリアナが幼い頃から面倒を見てきた。
ゼスト
竜族の族長で、アリアナの育ての父。アレクシアからは「じじい」と呼ばれている。
ルシアード
アウラード大帝国の皇帝。冷酷で他人への情を持たないが、アレクシアに出会って変わっていく。
ウロボロス
魔国で崇められている邪悪竜。アリアナの悪戯に苦しめられてきた。
デズモンド
魔国の王で、アリアナの元恋人。今世でもアレクシアの婚約者に。
アレクシア
アウラード大帝国の第四皇女で、大賢者アリアナの生まれ変わり。明るくマイペースで悪戯好き。
登場人物紹介

第一章　奇跡の再会

1　アレクシアのこれまでの活躍

アウラード大帝国の第四皇女として生まれたアレクシア・フォン・アウラードは、実は四百年前に実在した大賢者アリアナの生まれ変わりだった。

それにもかかわらず彼女は、生まれてすぐに実母であるスーザン第三側妃に森へ捨てられてしまう。

だが、そんな逆境にもめげず、大賢者として数々の修羅場を乗り越えてきた前世の経験や、前世から引き継がれた強大な魔力を活かし、アレクシアは赤子ながらも一人逞しく生き延びていた。

そうして過ごしていたアレクシアは三歳になった頃、父親であるアウラード大帝国皇帝のルシアードと出会う。

彼は、気に入らない者をすぐに厳罰に処する、冷酷な人格破綻者として有名だったが、アレクシアは臆することなく堂々と接した。ルシアードはそんな彼女に興味を持ち始めたのだった。

アレクシアはルシアードと交流を深めていき、アレクシアの母方の祖父であるローランド・キネガー公爵や伯父であるロインとも出会った。
その一方で、スーザン妃、正室であるエリザベス、帝国貴族の悪事を暴くといった、忙しい毎日を過ごしていた。
また、前世で従魔だった、フェンリルの幼体である白玉、ガルムの幼体である黒蜜、そしてケルベロスのみたらし、きなこ、あんこの三兄弟や、友人であった魔族のランゴンザレスとも奇跡的な再会を果たす。
更に魔国へ足を運び、前世の恋人でもある魔国国王デズモンドとも再会するのだった。
そんなある日、昔お世話になった竜族達に挨拶するべく、そして自身が転生したことを知らせるべく、アレクシアは竜族の里である〝竜の谷〟へ足を運ぶことに。
同行者はルシアード、デズモンド、ランゴンザレス、ウロボロス、アレクシアの前世アリアナの師匠で魔国の大賢者でもあるポーポトス。そしてアリアナの育ての親で竜族の族長だったゼスト。
もちろん、愛する五匹達も一緒だ。
アレクシア達を竜の谷で待ち受けるものとは――

2　竜の谷に到着しました！

眩い光に思わず目を閉じると、一瞬の浮遊感。

そして直後に、懐かしい匂いが心地よい風と共にアレクシアの鼻をくすぐった。
（戻ってきたんだ）
アレクシアは込み上げてくる涙をグッと我慢すると、思いっきり空気を吸い込んだ。
「気持ちが良いでしゅね！」
そんな嬉しそうなアレクシアを見て優しく微笑むゼストは、愛する娘の横に立つと、遥か昔から変わっていない、神木で作られた集落の門を見つめた。
昔、この門にアレクシアが落書きをする度、叱っていた思い出が蘇ってくる。
「もうそろそろお迎えがやってくるんじゃないでしゅか？」
ここにいるメンバーの凄まじい魔力と存在感に、竜族達はすぐに気付くだろう。
特に長い眠りから目覚めた族長であるゼストの気配がするのだ、側近達が気付かない訳がない。
この竜の谷は、先が見えない程に霧深い山々を幾度となく越え、ベテラン冒険者ですら到底歯が立たない最強クラスの魔物が数多く生息する広大な森を抜け、その遥か先にあるという幻の集落だ。
そんな幻の集落を初めて目にする人族のルシアードだけは興味深く周りを見渡していた。
「ここがお前のもう一つの故郷か」
ルシアードの呟くような言葉にアレクシアはただただ静かに頷いた。
「昔と変わらないのう～。ここに来ると色々な苦労を思い出すわい！」
昔を懐かしむのはポーポトスだが、苦い思い出の方が多いためか感動しながらも自然と胃の辺り

をさすっていた。
かつて、初代の魔国国王デイルズは定期的に国から消えていた。
しかも自身の孫デズモンドや、ポーポトスの孫でウィークル公爵家次期当主であるランゴンザレスという魔国の重要人物と連れ立って消えることが多いため、魔国は大騒ぎになるのが恒例だった。
その度に、デイルズの親友でもあった自分に泣きついてくる側近達を無下には出来ずに、連れ戻すことがポーポトスの仕事になっていた。
デイルズ達が向かう場所はいつも竜の谷と決まっていて、あまりにも危険な場所のために、毎回ポーポトスに白羽の矢が立つのだ。
さすがの魔族も、竜の谷に住む古竜――最強種族達とは関わりたくないというのが本音だった。
もし怒らせたりでもすれば、魔族といえどただでは済まないからだ。
そしてポーポトスには、デイルズの他にもう一人の親友がいた。
ゼストの祖父であり竜族初代族長のミルキルズだ。
強力な竜族を束ねる彼の家に我が物顔で居座るデイルズやデズモンド、ランゴンザレスを連れ戻すのはそう簡単なことではない。
そこでポーポトスは、ゼストに協力を取り付けた。
当時、ミルキルズが面倒を見ていたアリアナにポーポトスが魔法を教える代わりに、ゼストがデイルズ達を連れ帰る手伝いをしてもらうという内容だ。

ポーポトスとしては、元々アリアナを弟子にしたいと思っていたのだが、毎回彼女に逃げられていたので、ゼストの許可が下りたとなれば、一石二鳥でもあった。
だが、実際にはこのアリアナこそが一番の問題児だということに気付くのに、そう時間はかからなかった。
優等生だったデズモンドや自身の孫であるランゴンザレスがアリアナと交流していくうちに、誰にも手に負えない悪ガキに変貌するとは思ってもみなかった。
昔の出来事を嫌でも思い出してしまい、ポーポトスはアレクシアをジト目で見てしまう。
「お前のせいで苦労したわい！　デイルズは元々じゃが、この坊主もランゴンザレスもお前の悪知恵に影響されて憎たらしく育ってしもうたんじゃ！」
涼しい顔をしているデズモンドを睨み付けながら、アレクシアに抗議するポーポトス。
「いきなり何でしゅか！　デズモンドは元々捻くれてまちたよ！　ランしゃんはまぁ……進化したんでしゅよ！」
「何を⁉　いきなりあんな口調で話し出した孫を見た時のワシの衝撃が分かるか⁉」
「あい。一週間くらい？　寝込んで……少しボケまちた」
「ボケてはおらんわい！　全くお前は！」
ポーポトスは怒りのままにアレクシアへ拳骨を落とした。
彼の言うランゴンザレスの口調とは、オネエ口調のことである。

「痛いっ！　魔法しか使えないただの爺と思ってまちたが、結構痛いでしゅ！」
拳骨を食らい涙目になっている愛娘の頭を優しく撫でるルシアードだが、今にもポーポトスを襲いそうな凶悪な顔をしていた。
「お主ももっとこの子を厳しく育てんと、アリアナだった頃から更に進化した悪ガキになってしまうじゃろ！」
「む。アレクシアは良い子だ。この俺が言うんだ、優秀な良い子だ」
平然と言い返してくるルシアードと、その横で堂々と頷いているアレクシア。そんなお馬鹿な親子を見て、開いた口が塞がらないポーポトス。
「……危険じゃな！　こうなったらワシが厳しくお前の教育をせねばいかんわい！」
「嫌でしゅ！　ポポ爺退散〜！　ポポ爺退散〜！」
「ワシは悪霊か⁉」
アレクシアとポポ爺が醜い言い争いをしていると、集落を守っている頑丈な門が重苦しい音を立てて開き、そこから大柄で屈強な、竜族らしき男達が数人出てきた。
「む。何で敵意を向けるんだ？」
ただならぬ雰囲気を感じ取ったルシアードが疑問を口にする。
族長であったゼストが帰ってきたにもかかわらず、何故か今にも攻撃を仕掛けてきそうな竜族の男達に、アレクシアの周りにいた五匹の子犬従魔達も唸り声を上げて威嚇していた。

「……どういうつもりだ？」
自分達を取り囲んだ男達に静かに問いかけるゼスト。その凄まじい程の魔力に、一瞬だけたじろいだ男達だが、自分達の背後からこちらに歩いてくる男に気付いて落ち着きを取り戻した。
こちらに向かってくる男は何かを引き摺っているように見える。
「おやおや、もうお帰りですか？　ゼスト様」
「……アランカルトか」
ゼストからアランカルトと呼ばれた男は、その引き摺っていたものをいきなりこちらに放り投げてきた。
それを見たアレクシアは驚きの声を上げる。
「リリィー！」
放り投げられたのは、全身が血塗れで瀕死状態になっている族長代理、リリノイスだった。
「リリィしゃん！　死んじゃったでしゅか！」
「いや、まだ死んでないだろう」
愛娘に対して冷静に答えるルシアード。
アレクシアは投げ出されたリリノイスに急いで駆け寄り、回復魔法を施した。するとリリノイスの閉じていた瞼が徐々に開いていく。
「死んでな……この……馬鹿娘が！」

「馬鹿とは相変わらず失礼でしゅね！　まぁ、その調子なら大丈夫でしゅね！」
アレクシアの魔法によって徐々に回復していったリリノイスは、目の前にいるアレクシアの問いかけに答えられるまでになった。
「それにしても、アランカルトでしゅって!!　……って誰でしゅか？」
一応は驚いたフリをしたアレクシアだが、全然知らない男だった。
海のような綺麗な青色の長髪を靡かせ、琥珀色の瞳でこちらを見ている男。彼は竜族にしてはかなり華奢な方だ。
「お前、覚えてないのか？」
アレクシアの意外な反応に、ゼストは驚くと共に呆れ果てた。
「う～ん……近所に住んでいた方でしゅか？」
「ブッ」
首を傾げながらアランカルトに問いかける愛娘を見て、つい笑ってしまうルシアード。
「おやおや、私を覚えていないのですか？　それは心外ですね、アリアナ」
アランカルトは起き上がりながら睨み付けてくるリリノイスを一瞥すると、アレクシアの元へ向かおうとする。
しかしその前に、ゼストやルシアードを始めデズモンドやポーポトス、それに従魔達が立ち塞がった。

「……昔から取り入る相手を選ぶのがお上手ですね？　私は彼らに到底敵いませんよ」
「意味が分かりましぇん！　何でリリィしゃんをボコったんでしゅか！　リリィしゃんも、そこそこ強いのに何やってんでしゅか！」
アレクシアは前半はアランカルトを指差し、後半はリリノイスを指差してプンスカと怒っている。
アランカルトは何を考えているのか分からない笑みを浮かべていて、そんな彼の周りに数人の竜族の男達が集まり、アレクシアを睨み付けている。
リリノイスはそんな彼らを悔しそうな顔で見つめつつ暫く沈黙していたが、絞り出すような声で話し出した。
「この者達は、畏れ多くも弱ったミルキルズ様やオウメを始め……彼らの思想に反対する者達の子供達を監禁して、人質にしているのです。……私の息子もです。ゼスト様、これは私の落ち度です……。こいつらを側近にしていた私が悪いのです」
リリノイスの話によると、ゼストが眠りから覚めた後、彼はアランカルト達の様子がおかしいのに気付いていた。
だが、目覚めてすぐにいなくなったゼストを探すのを優先していた間に、子供達を連れ去られてしまったらしい。更にリリノイスの息子であるトトも、弱ったミルキルズを人質にするために無理矢理連れ去られたのだ。
リリノイスは皆を取り戻そうとしたが、人質の子供を平然と傷付けたアランカルトに、何も出来

ぬまま返り討ちにされたのだった。
「……いや、俺が悪いんだ。お前のせいじゃない。この竜の谷を……爺様のことを考えずにいなくなった俺が悪い。で、アランカルト。お前の目的はなんだ？　族長の座か？」
ゼストはアランカルトを射殺すような目で見ながら真意を問う。
「族長などと小さなことに興味ありません。私が欲しいのはこの世界の全てです！　あなたが眠り続け、ミルキルズ様が弱っている今が絶好の機会でしたのに……お前のせいで計画が台無しですよ！」
アランカルトは演技じみた大袈裟な話し方で自分に酔った様子から一転、アレクシアを睨み付け、怒りの感情を露わにする。
「お前がまた生まれてきたせいで、ゼスト様が目を覚ましてしまったではないですか！　昔から余計なことばかりしていましたが、今回ばかりは許しませんよ！」
「はぁ？　シアは悪くないでしゅよ！　お前の計画なんか知りましぇん、ミル爺やオウメ、それに子供達を今すぐ返しなしゃい！　このしゅっとこどっこい共！」
お互いに牽制し合うアランカルトとアレクシア。
「おい、アレクシアを見つめるな。下衆共め」
しかしルシアードが愛娘を抱きかかえ、アランカルトやその手下達をゴミを見るような目で見下す。相手が最強種族である竜族でもお構いなしだ。

「人族風情が小賢しいですね。ですが今は相手にしている暇はないのですよ」
「お前は一体何をしようとしているんだ？」
ゼストが更に核心に迫る質問をする。
「ああ、これから封印されているという〝原初の竜〟を呼び出します」
その言葉に息を呑むゼスト。
原初の竜とは、古の時代に存在したとされる最初の竜で、全てを支配する程の力と知恵を持っていた。神々はこの竜の存在を危惧してとある場所に封印したとされるが、アランカルトが言うには、その場所こそが族長の家の地下だという。
「昔、ミルキルズ様がオウメと話しているのをたまたま聞いてしまいましてね。私に聞かれていると気付いたミルキルズ様は冗談だと笑っていましたが、私は本当だと確信していました。地下を調べようとしましたが、族長の家ですからそれも出来ません。そんな時にアリアナが亡くなり、あなたが眠りについた。それからチャンスをずっと窺ってましたが、今回ミルキルズ様が弱ったタイミングで、強引に皆を監禁したあとにすぐ地下を調べました。……そうしたらこんな物を見つけました」
そう言ってアランカルトが取り出したのは、美しく虹色に光り輝く丸い玉だった。
「ですが、一つ問題がありましてね。おそらくこれが原初の竜に関わる物だと思うのですが、これでどうやって原初の竜を呼び出すのか分からないのですよ。ミルキルズ様に聞こうにも、もう話せ

ない状態なので困りました。ですが、ゼスト様ならご存じでしょう？」
「ミル爺に会わせてくだしゃいな！　うぅ……ミル爺」
もう話せない状態と聞いて、ミルキルズが心配で居ても立ってもいられないアレクシア。
「……原初の竜を呼び出してどうするんじゃ？　意のままに操れる相手ではないぞ？」
今まで黙って聞いていたポーポトスがアランカルトに静かに問う。
「ああ、これを使うんです」
アランカルトは禍々しい気配を放つ紅い宝石を取り出した。
「ほう……寄生石か。これを埋め込んで意のままに操るのか」
デズモンドが感心したように呟く。
「ええ。これも族長の家の地下にありましてね？　貴重なものですが、見つけたなら使わないと勿体ないですから」
そう言って含みのある笑みを浮かべるアランカルト。
寄生石とは、かなり希少な上に中々手に入らない代物で、操りたい相手の体に埋め込むと、その者を一生涯操れるという恐ろしい物なのだ。
族長家の地下には、様々な貴重なお宝が眠っている。アレクシアもアリアナ時代に何度も侵入しては、オウメやゼストに見つかり説教を受けるというのが日常茶飯事であった。
「全然思い出せないんでしゅが、このアランカルトって何者なんでしゅか？」

そんな緊迫した状況を見事にぶち壊すのはやはりアレクシアだった。

3　衝撃の事実が発覚！

「おい、お前……空気を読め！　今だけで良いから！」
ゼストは空気の読めないアレクシアを懸命に諭す。
「本当にお前は昔から癪に触りますね。人族の分際で最強種である私達竜族の集落を我が物顔で歩き、族長やミルキルズ様に可愛がられているのを良いことに、好き勝手して里の秩序を乱し続けた！」
「うっ！　それについてはシアは何も言えましぇん！」
「いや、否定しろよ。……出来ないか」
アランカルトの言い分に何も言い返せないアレクシアに呆れて、ついツッコんでしまったデズモンドだが、少し考えて妙に納得してしまった。
「アランカルトはお前を否定し続けた反対派の一人だ。本当に覚えてないのか？」
そう言ったゼストがアランカルトを睨む。
「う～ん……反対派はたくさんいまちたから、誰が誰だか～？」
首を傾げながらそう言い放ったアレクシアに、殺気を向ける竜族の男達。
さすがに冷静を装っていたアランカルトの顔色が変わり、一人の竜族の男に何か目で合図する。

その男は頷いて集落の中に消えていった。
「リリノイスは同じ反対派だと思っていたんです。昔から誰よりもアリアナに冷たく辛辣でしたからね。ですが攻撃的ではなかった。今考えれば、わざと反対派になりアリアナを殺そうとしていた我々の行動を見張っていたんですよね？」
「いやいや、リリィしゃんに限ってそれはないでしゅよ！」
見事に完全否定するのはアレクシアだ。
「お前が否定するなよ」
アランカルトの意見を真っ向から否定するアレクシアに苦笑いするゼスト。リリノイスもそんなアレクシアを見て呆れて溜め息を吐いている。
「まぁ、今更どうでも良いです。結局我々を監視するためにわざと自分の側近に置いていたようですが我々はもうこの集落自体には興味はありませんから」
「ああ、確か世界と言っていたな」
「ええ、ゼスト様。弱いくせに我が物顔で国を築き暮らしている人族を、全て滅ぼしてしまえば良いと考えました。もっと早く行動に移せば良かったと後悔しているくらいです」
「気の弱いお前がここまで出来るとはな。いつも誰かの後ろで囁き操っていた卑怯なアランカルト。自分では何一つ行動出来ないお前にしては、自分で動いただけ偉いんじゃないか？」
ゼストの挑発に顔色が変わり、正面から睨み付けるアランカルト。そのタイミングで先程の男が

縄で結んだ何かを引き摺りながらやってきた。
それを見たアレクシアの表情が一変して、殺気を放ち始めた。
「お前達は絶対に許しましぇん！」
引き摺ってこられたのは、酷く傷付いた幼い竜だった。先程言っていた、アランカルトが傷付けた子供だろう。
『うぅ……いちゃいよ……』
足が血塗れで痛々しいこの子竜を人質に、アランカルトはゼストから、原初の竜の召喚の仕方を聞き出すつもりなのだろう。
「本当にどうしようもない奴だ」
ゼストも激しい怒りで殺気を解き放ったため、目の前にいた数人の竜族の男達がガタガタと震えて崩れ落ちた。
「ああ、動かないでくださいね？　この可哀想な幼い子の首が飛びますよ？　さぁ、答えてください」
しかし、脅迫するアランカルトの横で子竜を繋いでいる縄を持っている男は、憎たらしくもニタニタと下劣な笑みを浮かべている。
「俺は何も知らない。そもそも原初の竜の話は竜族に伝わる御伽話だと思っていたし、その玉も今初めて見た」

「そんな言葉を信じろと？　この子に早く死んでほしいんですか？」
ゼストの答えに焦るアランカルトは、子竜を掴んで傷つけようとする。
すると、何を思ったのかアレクシアが亜空間からあるモノを取り出しながら叫んだ。
「待ちなしゃいな！　……これが目に入らぬかーーー！」
『いでで！　だから頭を掴むな！』
アレクシアが頭を鷲掴みにして取り出したのは、邪悪竜ウロボロスであった。
亜空間で気持ち良く眠っていたのに急に起こされたウロボロスは、いまいち状況が理解出来ていない。
「アレクシア、それはウロボロスだろう？」
暫くの沈黙が続いたが、いち早く我に返ったルシアードが怪訝そうにそう言う。
だが、アレクシアの口から放たれたのは衝撃的な言葉であった。
「ずっと隠してまちたが……実はウロボロスが原初の竜なんでしゅ！　ドヤ！」
そう言ってドヤ顔でふんぞり返るアレクシアと、状況が理解出来ずに固まってしまう一同。
「あれ？　反応が薄いでしゅね。結構衝撃の事実だと思ったんでしゅが……」
『お前……どうするんだ、この状況？』
アレクシアとウロボロスは、皆の反応が思いのほか薄いのがショックだったのか二人でコソコソと話し始める。すると、いち早く我に返ったゼストが怒りの表情でアレクシアに詰め寄ってきた。

「おい！　この状況で冗談はやめろ！　監禁されている者達の命がかかっているんだぞ!?」
「冗談じゃありましぇんよ！　ウロボロスが原初の竜なんでしゅ！　シアが……昔の私がウロボロスを助けたんでしゅから！」
アレクシアのとんでもない発言で、ゼストはまたまた衝撃の事実を知ることになった。
「なっ!?　何を言っているんだ？　ウロボロスはお前がどこからか連れてきた……連れてきたな。爺様も……いや、もしかして爺様も関わっているのか？」
ゼストの言葉にアレクシアはハッとして、ゆっくりと目を逸らしながら口笛を吹こうとするが、残念ながら鳴っていない。
「ああ、分かりやすいな。爺様も関わっているんだな。はぁ……ウロボロス、本当なのか？」
頭を抱えながらもウロボロスに真意を問うゼスト。
『……その話をする前にやっておくことがある』
ウロボロスは呆然と立ち尽くすアランカルト達の元へパタパタと飛んでいく。
すると次の瞬間、アランカルト達が急に苦しみ出して口から泡を吹き次々と倒れていった。そして傷付いて倒れていた幼い竜が淡く光り出したと思った瞬間には、もう傷が完全に消えていた。
『ありぇ～？　いちゃくにゃい！』
そう言って嬉しそうに尻尾をフリフリしている幼い竜の首に固く結ばれていた縄を、アレクシアとウロボロスが解いてあげる。そこの空間だけ見ればほんわかしているが、他の者は理解が全然追

いついていなかった。
衝撃の事実を未だに受け入れられない一同を他所に、アレクシアとウロボロスは集落に向かって既に歩き出していた。ルシアードも当然のようについていき、そして可愛い五匹の子犬従魔達も、その後ろをよちよちとついていく。
「しゃて、子竜達はどこにいるんでしゅかね？」
『族長の屋敷から微かに気配がするぞ！　多分全員一緒に閉じ込められてるんだろう』
アレクシアとウロボロスが話していると、後ろからゼストが追ってきて、アレクシアの前に出て、行く手を阻んだ。
「おい、どういうことか分かるように説明しろ！」
「……説明はしましゅが、まずはミル爺やオウメ達を助けるのが先でしゅよ！」
「……ああ、確かにそうだな。だが、救出したら真っ先に説明しろよ！」
「あいよ！」
アレクシアは軽く頷くと、騒ぎにならないよう気配を消したウロボロスを頭上に乗せて先を急いだ。
ゼストやデズモンド、そしてポーポトスが後に続くが、ゼストはその前に、倒れているアランカルト達を拘束するようにと、回復したリリノイスに指示を出した。
「あとでコイツらにも話を聞くから厳重に拘束しておけ。お前の息子のことは俺達に任せろ」

「ゼスト様、宜しくお願い致します」
リリノイスはゼストに深く頭を下げた後、倒れているアランカルト達を次々に拘束していく。
その間、ちらっと何か言いたそうにアレクシアを見たリリノイスだが、ゼストの指示を優先して動き始めたのだった。

4　先に助けに行きます!!

アレクシア達が集落の中に入っていくと、家の中から一斉に人が出てきて老若男女問わず皆がゼストの前に跪いた。
「アランカルト達はもう拘束した！」
ゼストの報告に歓声と安堵の声が上がるが、奥から数人の男女が前に出てきて涙ながらに訴え始める。
「私達の子が誘拐されています！　どうかお助けください！」
「俺の子は……傷付けられたと聞きました……うぅ」
そう言い悔しそうに涙を流す、竜族の中でも人一倍屈強な男。そこへ元気になったあの子竜が、パタパタと飛んでやってきた。
『あーー！　とーちゃんがにゃいてりゅー！　どーちたにょ？』
「ああ！　ロウーー！」

屈強な男は子竜をロウと呼び、思いっきり抱き締めた。
『うぅ……くるちい……』
子竜が苦しそうにしているのを見て、アレクシアは助走をつけると、屈強な男の脚めがけて思いっきり蹴りを入れる。
「ウリド！　この子から離れろでしゅーー！」
「ん！　いててて！　何すんだ!?　……ん？　この気配はやっぱり間違いじゃなかったのか？　でもアリアナは……！」
脚をさすりながらも、目の前の幼子を見て、驚きを隠せないウリドと呼ばれた屈強な男性。
「相変わらずの脳筋馬鹿ちんでしゅね！」
「ああ、その憎たらしい言い方に人を馬鹿にしたような顔！　やっぱり……」
「……どんな顔でしゅか」
ウリドの発言に呆れるアレクシア。
この男の名はウリド。
平民で、農業を営んで生計を立てていた。お人好しで頭が良い方ではないので皆からはよく揶揄われたり、馬鹿にされたりしていたが、それでも怒ることなく実直に生きていた……アリアナに出会うまでは。
アリアナ率いる悪ガキ集団と渡り合ううちに、怒りと知恵と力を身に付けて、いつの間にか竜族

の中でも最強クラスの実力になっていた。そして里で一番の美女を嫁に迎え、ゼストの側近にまで上り詰めていた。
「アリアナなのか？」
信じられない思いでアレクシアを見つめるウリド。
「そうでしゅが、今はアレクシアでしゅよ」
「アリアナ……」
ウリドは下を向き肩を震わせている。
「久しぶりでしゅね！」
「……畑を奪いに蘇ったのかぁぁ!!」
ウリドの叫び声に、ここにいる全員が唖然としてしまう。言われた当の本人も開いた口が塞がらない。
「何言ってるんでしゅか？　馬鹿ちんにも程がありましゅよ！」
「お前らが散々畑を荒らしたのを俺が忘れたと思うか!?」
「荒らしたでしゅと!?　違いましゅよ！　頂いたんでしゅよ！」
「同じだ！　この馬鹿が！」
「馬鹿ちんに馬鹿って言われまちた！　キィィ！」
悔しくて地団駄を踏むアレクシアを宥めるルシアードとデズモンドだが、笑いたいのを必死に堪

えていた。この状況に興味がない五匹の子犬は、主人の足の動きに合わせて楽しそうに駆け回っている。気配を消しているウロボロスはアレクシアの頭上で大爆笑している。
「落ち着け、ウリド。今はもうそんなことはしないだろう……多分な」
「ゼスト様！　その最後の不穏な言葉は何ですか!?」
暑苦しいウリドに詰め寄られて、苦笑いしながら一歩後ろに引くゼスト。
アレクシアはプンスカと怒りつつも、目的を果たすために皆へ事情を説明してから先を急いだ。
暫く歩いていると、最奥に大きな家屋が見えてきた。その懐かしい佇まいを見たアレクシアは気付けば自然と走っていた。
その後ろにゼストが続いて、厳重に閉まった門を魔法で無理矢理こじ開けた。
「ミル爺の弱い魔力を感じましゅ！」
ゼストも同じく感じたのか、アレクシアを抱っこして屋敷の中に入っていく。
そして長い廊下を歩いていき一番奥の広間に着くと、強力な結界が張ってあるのに気付いた。強力ではあるが、ゼストにとっては簡単に破れるものだった。
「結界は壊した。中に入るぞ！」
「あい！」
アレクシアとゼスト、そしてウロボロスは意を決して広間の襖を開ける。
そこには布団の中で眠っているミルキルズと、その横で子竜達を守っているが痩せ細り息も絶え

絶えのオウメがいた。
「ミル爺！　オウメ！　うわーーん！」
アレクシアは眠るミル爺に駆け寄り泣き崩れる。ミルキルズはもうミイラのようになっていて、今にも息を引き取りそうであった。オウメも目がもう見えていないのか、気配を手で探っていた。
「この気配は……アリアナ様とゼスト様！　……あぁ神よ……死ぬ前に会わせてくれてありがとうございます……」
「オウメーー！　そんなこと……言わないでくだしゃい！　うわぁぁーーん！」
オウメの手を握りながら懇願するアレクシアと、沈痛な面持ちのゼスト。
そんな光景をアレクシアの頭上で見ていたウロボロスが、パタパタとミルキルズとオウメの間に立つ。
『俺の魔力を分ける。このチビ達を外に出してくれ』
丁度そこへアレクシアのあとを追ってきたルシアード達が入ってきたので、泣きじゃくる子竜達を連れて出ていってもらう。そして部屋にはアレクシアとゼスト、ウロボロス、そして眠るミルキルズと戸惑うオウメだけになった。
緊張感が漂う中、ウロボロスが眩く光り出したと同時に、ミルキルズとオウメも光り出していく。
アレクシアとゼストは、余りにも膨大な魔力と眩さに目を瞑ってしまう。
しかしそれからすぐに光が消えていくのが分かり、アレクシアはそっと目を開けようとした……

のだが、その時ウロボロスが急に叫び出した。
『やばいぞ！　久しぶりに本気の力を出したら加減を間違えた!?』
パタパタとアレクシアの周りを回って焦り出すウロボロス。
「何でしゅか！　失敗し……え？　えええええーーー！」
ウロボロスの慌てぶりに失敗したと思ったアレクシアは、急いでミルキルズとオウメを見たとたんに、今までにないくらいの衝撃を受けた。
「おいおい、冗談だろ!?」
ゼストも目の前の光景を信じられない気持ちで見ていた。
そこには十代前半くらいの金髪の美少年と銀髪の美少女が、肩を寄せ合いスヤスヤと眠っていたのだった。

5　伝説達の復活です！

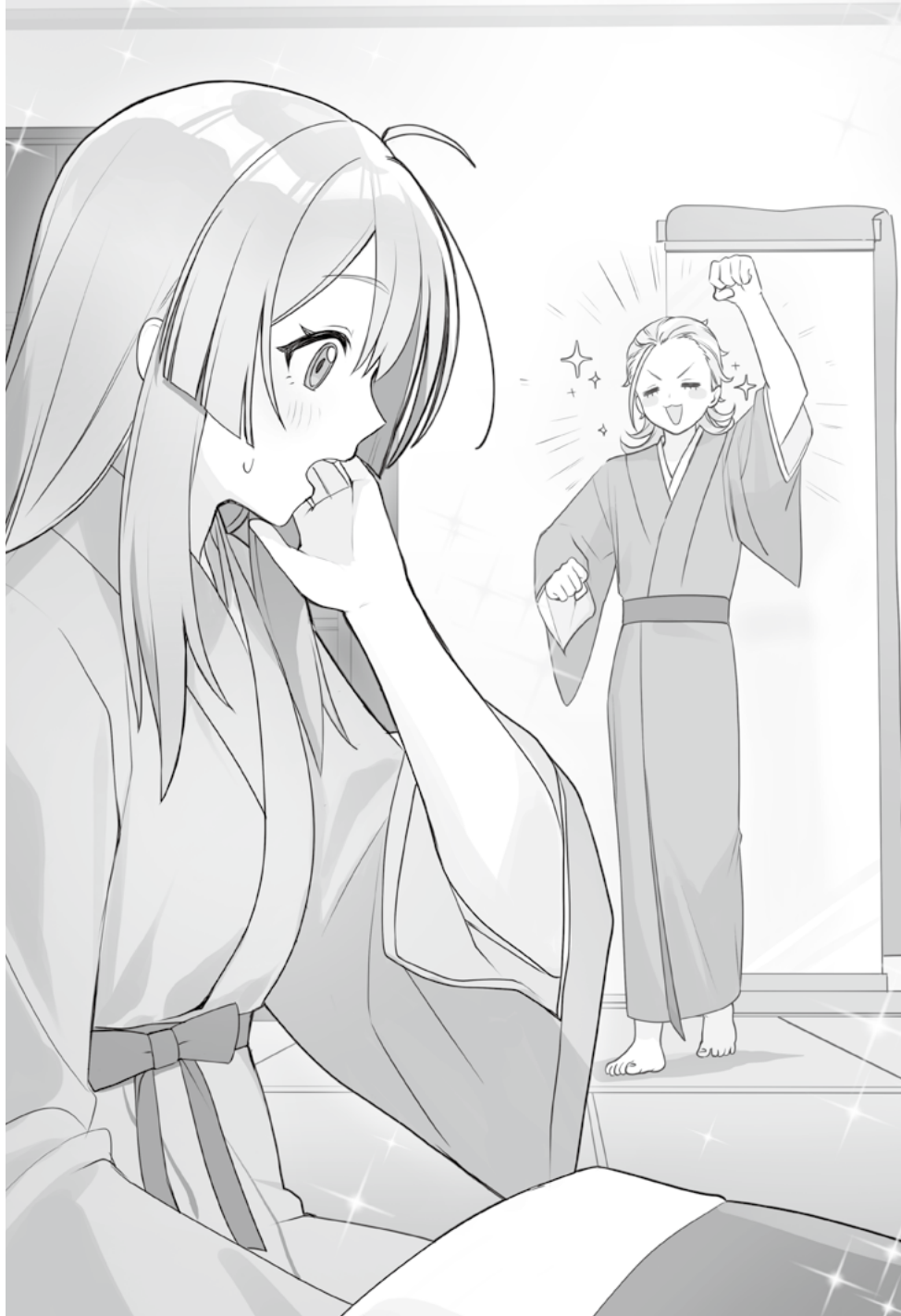
唖然としたまま固まるアレクシアとゼスト。
一方、外で待機していた者達は眩い光と共に膨大な魔力を室内から感じ、更にそのあとすぐにアレクシアの叫び声が聞こえたので、ルシアードやデズモンド、それにポーポトスは急いで襖を開けようとした。だが白玉達が先に障子を破って、一匹また一匹と入っていく。
「全く……開けるまで待っとれんのか？」

主にそっくりな五匹の子犬従魔に呆れるポーポトス。
ルシアードは最後のあんこが障子を破って通ろうとした時に、勢いよく襖を開けた。なのであんこはその勢いでコロコロと転がっていき、眠る金髪の美少年と銀髪の美少女にぶつかった。フラフラと目が回っているあんこの元に心配して集まるモフモフ兄弟達だが、その毛並みが眠る二人の鼻をくすぐる。
「へ……へっくしょーーん!!」
その美しい姿からは想像もしないような豪快なくしゃみが聞こえてきた。
「へくしょんって何でしゅか！　起きてくだしゃい、ミル爺!!」
アレクシアがくしゃみをした少年をミル爺と呼んだことに、デズモンドとポーポトスは驚きを隠せない。
だが、少年から溢れ出ている凄まじい魔力はミルキルズの完全復活を知らせていた。またその横で眠る銀髪の少女からも懐かしい魔力が感じ取れた。
「この子達は……ミルキルズ殿とオウメなのか？」
ポーポトスは未だに信じられないでいる。
「確かもう老人じゃなかったのか？」
ルシアードがアレクシアに疑問をぶつけた。
「そうでちた。……でもウロボロスが魔力を分けたら力が強すぎて、若返ってしまいまちた！」

そう言って頭を抱えるアレクシア。まさか原初の竜の力がこんなにも凄いとは、思っていなかったからだ。
『俺も久しぶりに力を使ったから……すまん』
アレクシアの頭上で反省するウロボロスは項垂れていた。
「まぁ、元気になったから大丈夫でしゅよ！　我々は開き直りましゅ！」
『お前は能天気で良いな』
すると寝ていたミルキルズの目がゆっくりと開いていく。
「ん……？　凄く気分が良いぞ……？　わしは死んだのかのう……。アリアナにやっと会えるぞ」
そう言って勢いよく立ち上がったミルキルズは、目の前にいた人物を見て驚く。
「おー！　ポーポトスじゃないか！　お前も死んだのか、まぁもう歳じゃっ……」
「ワシはまだ生きておるわい！　お主もな！」
ポーポトスは持っていた杖でミルキルズの頭を叩く。
「イタタ……ん？　お前……ゼスト！　いきなり目覚めたと思ったらどこかに消えおって！　ワシは弱っていてお前の気配を追えなかったが無事そうじゃな」
叩かれた頭をさすりながら辺りを見回していたミルキルズは、孫であるゼストを見つけて涙ぐんでいた。
「爺様、俺の方こそこんなことになっているのを知らずに勝手なことをしました。申し訳ありません。無事で良かったですが……」
言いかけてそのあとの言葉に詰まる孫を不思議そうに見ていたミルキルズは、ゼストの横にいた小さなアレクシアに気付き我が目を疑った。
「そんな……お主……。確かにこれはアリアナの魔力じゃ……！　感じるぞ！」
「興奮すると血圧が上がりましゅよ、ミル爺」
涙をポロポロ流しながらミルキルズを見つめるアレクシア。
「おお、その遠慮のない言い方はアリアナじゃ！　……うぅ……可愛いわしのひ孫よ！」
「うわぁぁぁーーん！　ミル爺ーー！」
「うぅ……アリアナ……よしよし、会えて嬉しいぞ……うぅ」
お互いに抱き合い再会を喜んでいる二人。
「……感動の再会なのは分かるが、見ていると複雑だな」
「ああ、確かに良い気分ではないな」
ルシアードとゼストは、抱き合って再会を喜ぶアレクシアとミルキルズを見て複雑な気分になる。見た目が若返ったミルキルズは、絶世の美少年なので、もう老人としては見られないからだ。だが、一番に騒ぎそうなデズモンドは、真面目な顔をして何か考え事をしているようだ。
「アリアナ、お前どうして子供の姿になっているんじゃ？　それにお前は死んだはずじゃろう？」
「転生しまちた。今はアウラード大帝国第四皇女アレクシアでしゅよ！　あ、この人が父上で

しゅ！」
そう言ってドヤ顔をすると、ルシアードをミルキルズに紹介する。
「おお、転生とは驚きじゃな！　ふむ、今度の親はまともそうじゃな！」
「まともではないでしゅよ。かなり変でしゅ！」
「おい！」
さすがにツッコむルシアード。
愛娘から散々な言われようのルシアードを見て笑うゼスト。
「ジジイも同じようなものでしゅよ」
「おい！」
ルシアードと同じようにツッコむゼスト。
納得いかないゼストの横で馬鹿にしたように笑うルシアード。
「おお、実の父親も育ての父親も似たもの同士じゃな！」
そう言って豪快に笑うミルキルズ。
「……ミル爺、まだ自分の異変に気付かないんでしゅか？　若さは見た目だけなんでしゅかね？」
「ん？　若さじゃと……え？　……え？」
今初めて自分の異変に気付いたらしいミルキルズは、急いで隣の部屋にある鏡の前に立つ。そこに映ったのは遥か遠い昔の自分の姿だった。

「えええええーーー！　わし、若い!!」
その驚き方が面白かったのか爆笑するアレクシアと五匹の子犬従魔達。
「さすがミルキルズ殿ですな」
嬉しそうに鏡の前でくるくる回っているミルキルズを見て苦笑いするポーポトス。
すると、この騒ぎでまだ眠っていたオウメが目を覚ました。
「ん……私は一体……あら、気分が良いわ！　死んだのね……でもアリアナ様に会えるわ！　元気かしら……？　ん、あれは！」
「ワシは死んでませんぞ、オウメ」
するとオウメと目が合ったポーポトスは、彼女が何か言う前に否定した。
「私は生きているんですか？　それに体が軽いわ……！」
「おお！　オウメよ！　お主も随分と若返ったのう！」
オウメは隣の部屋の鏡の前でくるくる回る少年を見て驚愕する。それは遥か遠い昔に苦楽を共にした若き日のミルキルズその人だった。
「ミルキルズ様ですよね？」
「ああ、わしじゃよ！　オウメも鏡を見てみよ！」
放心状態だったオウメは、ミルキルズに言われた通りに鏡を見る。
「え……えええええーーー！　私、若いですわ!!」



琥珀色の瞳で透き通るような美肌をしている銀髪の美少女が叫ぶ。
ミルキルズを押し退けて嬉しそうにくるくる回るオウメを見て、またまた大爆笑するアレクシアであった。
「あっ！　ミル爺ー！　なんでアランカルトに変なことを言ったんでしゅか！」
「ん？　アランカルト？」
可愛く首を傾げる金髪美少年だが、中身は爺さんだ。
「原初の竜がこの家の地下に眠っているって言ったんでしゅよね!!　それがこの事件のそもそもの原因でしゅよ！」
「あ……あれはオウメが原初の竜はいないとか神話ですとか言うから～……わしも意地になってしもうてのう……嘘をついた!!」
酒に酔っていたこともあり、原初の竜について知っていたミルキルズは話を更に大きくしてしまった。オウメを驚かせたいというくだらない理由であったが、それをたまたまアランカルトが聞いてしまったというのが事の真相だった。
「何やってんでしゅか!!　それにこの玉は何だったんでしゅか？」
アレクシアはアランカルトからぶん取った虹色の玉をミルキルズに見せた。
「玉？　ああ、地下に置いておいた虹色の玉か!!　あれは昔エルフからもらったんじゃ！　確か魔力を込めると精霊が現れて願いを一つ叶えてくれるらしいぞ」

ドヤ顔で言うミルキルズに、もはや呆れてしまうアレクシアであった。
だが、そんな皆が呆れる中で何故か魔国国王のデズモンドだけは厳しい顔をしていた。

閑話　ウリド奮闘記

これは、アリアナ率いる悪ガキ集団に立ち向かった、竜族ウリドの奮闘記である。

「おーい、ウリド！　悪いけどうちの畑を耕すの手伝ってくれ！」
「ああ、分かった！　ちょっと待っててくれ！」
竜族の中でも一際大柄な青年。青紫色の瞳で赤髪を短く切り揃えた好青年で、屈強な体格に反して内向的な性格で大人しく人が好いためか、何かと雑用や力仕事を押しつけられる。それにも気付かずに快く引き受けて、朝から夜遅くまで働き詰めだ。
だが、元々畑仕事が好きで全然苦にならないウリドは、このままごく平凡に生きていくはずだった。あの悪魔が現れるまでは……
ある日、ウリドの畑に小さな影が迫っていた。
「良いでしゅか！　ここのオレンは甘くておいちいんでしゅよ！　でもジジイが一日三個しか食べさせてくれないんでしゅ……だから思いっきり食べたいと思いましゅ！」
小さな影の主で悪ガキ集団のボスであるアリアナが、堂々と宣言した。

「あら、何で私まで犯罪の片棒を担がないといけないのよ！」
優等生から悪ガキオネェに生まれ変わったランゴンザレスが、アリアナの発言に呆れていた。
「いいから！　これが袋でしゅ！　ここに入れてくだしゃいな！」
有無を言わさずにランゴンザレスに袋を渡して畑に入っていくアリアナ。しょうがなく幼子の後を追うランゴンザレスだが、どことなく好奇心を刺激されていた。今まで我慢を強いられてきた反動だろう。
「キシシ……美味しそうでしゅね！」
「キシシって……早く取っていくわよ！」
ランゴンザレスに急かされながら、一個、また一個と袋に入れていくアリアナだったが、その後ろから大きな影が迫っていた。
「おい！　そこで何やってる！」
ウリドは自分の畑に入っていく小さな影に気付いていた。
ここは竜族の里だ、小動物は決して近付くことはない。彼が見たのは、黒髪の小さな幼子と紫色の髪の綺麗な少年だった。
「げっ！　見つかりまちた！」
アリアナは袋を担ぐとそそくさと逃げようとしたが、簡単に首根っこを掴まれてしまう。ランゴンザレスは諦めて降参のポーズをとっていた。

「ランしゃん、助けてくだしゃいな！」
「あら、この屈強な竜族に立ち向かえって言うの～？　無理よ～！」
「魔公爵が何言ってんでしゅか！　もう、おじしゃん降ろちて！」
アリアナが足をバタつかせて抗議する。
「お前達はどこの子だ!?　親の所に案内しろ！」
「……親はいましぇん……。スン……お腹がしゅいて……スン」
畑を荒らされて物凄い勢いで怒っていたウリドだが、幼子の涙の告白に心を痛めて、急いで降ろしてあげる。
「腹が空いてんのか？　じゃあ今回は多めに見てやる。これからはちゃんと俺に声をかけて……」
「おーい、アリアナ！　ここにおったのか！」
畑の入口でこちらに手を振る人物を見たウリドは驚愕し、急いでその人物の前に駆けつけると平伏した。
「あ……あのミルキルズ様、どうしてこんな所にいらっしゃるのですか!?」
そこには初代竜族族長であるミルキルズが立っていた。
竜族にとってミルキルズや現族長であるゼストは雲の上の偉大な存在で、会えることは滅多にないはずだが、何故か今目の前でこちらに向かい手を振っていた。
「ああ、ひ孫の気配を追ってきたんじゃが、お主は？」

「ウリドと申します！　ここでオレンを育てています！」
「おお！　オレンはアリアナの大好物でな！」
そう言うミルキルズの視線の先にはあの幼子がいた。
「……あの、ひ孫というのはそこにいる幼子ですか？」
「ああ、可愛いじゃろ？　アリアナよ、こっちにおいで！」
嬉しそうに手を振るミルキルズの横で、アリアナをジト目で見つめるウリド。そこへ気まずそうにやってきたアリアナとランゴンザレス。
「ミルキルズ様のひ孫なのか？」
ウリドは噂で、ゼストが人間の子を連れてきたと聞いたことがあった。
それがもし本当なら、竜族の気配が全くしないこの幼子のことだろう。
「……誰でしゅか、この爺しゃん！　あたちは知りましぇん！」
「ガーーン！　ミル爺ショック!!」
アリアナの爆弾発言にショックを隠しきれないミルキルズは、その場に崩れ落ちた。
「ミルキルズ様!?　おい、この方は偉大なる初代竜族族長だぞ！」
ウリドは幼子に抗議する。その横でランゴンザレスがミルキルズの背中をさすりながら慰めていた。
「爺よりオレンをくだしゃいな！」

だが全く動じないアリアナ。
「小娘！　ミルキルズ様に向かって爺だと⁉」
ウリドは幼子を捕まえようと追いかけるが、袋を担ぎながら器用に逃げ回るので中々捕まえられない。
そのうちに騒ぎを聞きつけた野次馬が集まり始め、そこにミルキルズがいることで更に大騒ぎになってしまう。
睨み合うアリアナとウリド。息を呑み二人を見守る野次馬達。そんな二人に呆れ返っているランゴンザレス。落ち込んだままのミルキルズ。
「俺のオレンを返せ」
「えっ、ダジャレでしゅか？　……嫌でしゅ！　代金はゼストというジジイにつけといてくだしゃい！」
「俺に何だって？」
鼻息荒く宣言したアリアナの後ろからやってきたのは、報告を受け騒ぎを収めに来たゼストだった。現族長の登場に、ウリドや野次馬達はまたしても急いで平伏した。
「お前という奴は！　また騒ぎを起こしたのか⁉」
ゼストに拳骨を落とされ、目の前に星が飛んだアリアナはフラフラになり、ランゴンザレスに支えられる。この日はゼストがウリドに謝罪して事を収めたが、アリアナとウリドの争いは始まったばかりだった。

次の日、ウリドはいつものように畑仕事をするために家を出た。
昨日は散々な目に遭ったが、その代わりに本来なら話すことさえ出来ないはずの偉大なミルキルズ初代族長や現族長のゼストと交流し、自分の育てたオレンを食してくれていることに感動した。
「悪いことばかりじゃなかったな」
そう自分に言い聞かせて畑仕事に取り掛かったが、暫くして嫌な気配を感じ周りを警戒する。
（まさか……昨日の今日だぞ⁉）
ウリドの家は里の外れにあり、一本道を歩いてくる人物は確認出来る。こちらに近付いてくる小さな集団に息を呑んだウリドは、畑の入口に移動すると仁王立ちして威圧することにした。
『ねぇ～オレンたべりぇりゅにょ～？』
『おいちいよね～』
『ぼきゅもたべゆ！』
「ふふふ、あたち達のやぼーをじちゅげ……実現しゅるために！」
悪い顔をして笑うアリアナだが噛み噛みだ。
『『『やぼーーー！』』』
多分あの子竜達は意味を分かってはいないだろう。

昨日の小さな悪魔が、今度は三頭の子竜を引き連れてこちらに向かってきていた。
赤い子竜はプニで、青い子竜の双子はデデとピピだろう。この子達の親は、ゼスト様の側近で偉大なる戦士達だ。
「お前達！　何しに来た⁉」
屈強な竜族の中でもとりわけ屈強で大柄なウリドの仁王立ちした姿に、子竜達は驚いてアリアナの後ろに隠れてしまった。
「あっ！　ウリボー！　お願いがあってきまちた！」
昨日のことなどなかったかのように親しく話しかけてくるアリアナ。
「ウリドだ！」
仁王立ちしてアリアナに睨みを利かせるウリド。
「どっちでも良いでしゅよ！　そんな怒りん坊にょウルドにお願いがありましゅ！」
そんなウリドの睨みを無視して話し続けるアリアナ。
「ウ・リ・ドだ！　お願いだと⁉　却下だ！」
ウリドが有無を言わさずに却下した。するとアリアナはヘナヘナと崩れ落ちて動かなくなってしまう。
『アリアニャーー！　どうちたにょ⁉　ぽんぽんいたいにょ？』
ピピがポロポロ泣き始めた。

『アリアニャをいじめたわにぇ⁉』
ウリドに食ってかかる強気なプニ。
デデはファイティングポーズを取り、今にもウリドに襲いかかりそうな勢いだが、見ていて可愛いだけだ。ウリドは慌ててアリアナに駆け寄っていく。
「おい、大丈夫か？　腹が痛いのか？」
「うぅ……あたちはただ自分でもオレンを育てたくて……おちえ……教えてもらおうとしただけでしゅ……」
悲しそうに言うアリアナを、お人好しのウリドは無下に出来ずに頭を抱えた。
（こんなおちび達に畑仕事は無理だぞ⁉　それにこの子を信じて良いのか⁉）
考えていたウリドだが、ふと視線を感じて顔を上げると、アリアナと子竜達が期待感をもったキラキラした瞳でこちらを見ていた。
「はぁ……条件がある」
考えるのを諦めたウリドが子供達を集めた。
「言ってみたまえ」
「……急に偉そうだな。畑はここの横にお前達でも出来る小さい畑を作ってやる。俺が教える通りに安全に作業すること。いいな？」
『『『ハーーーイ！！！』』』

嬉しそうにパタパタ飛び回る子竜達。
「ふむ、了解ちた！」
アリアナも笑顔で頷く。
嬉しそうな子供達を見て自然と笑顔になるウリド。
ウリドは自分の畑のすぐ横を急いで耕し、縦横四メートルくらいの小さな畑を急いで作った。
「おおっ！　小さいでしゅね……でもここからどんどんと大きくしていきましゅよ!!」
『プニはおみじゅをあげる～！』
赤い子竜のおませな女の子プニが手を挙げる。
『ぼきゅもやる～！』
青い子竜の双子の弟ピピが半泣きで手を挙げた。
『おりぇは……？？』
青い子竜の双子の兄デデは首を傾げていた。
皆はウリド指導のもと、オレンの種を一生懸命に植えて水をあげると、今度は畑の周りを囲う柵を作り始めた。
夕方までかかったが、不恰好ながら何とか柵が出来上がった。そして入口の看板には『オレンのはたけ』と拙い字で書かれていた。
ウリドは帰る時間が遅くなってしまった子供達を家まで送りながら、いろんな話をした。

「ジジイには早く結婚ちてほしいんでしゅよ……いい歳でしゅから」
「お前、本当に三歳児か？」
溜め息を吐きながら話すアリアナを見てウリドは呆れるが、内容が内容だけに苦笑いしか出来ない。
「あら？　アリアナちゃんじゃない！」
手を振りながら歩いてくる人物を見て硬直してしまうウリド。
そこにいたのはミルキルズ初代族長の腹心であり英雄でもあるロウゴイヤの孫にして、里で一番の美女ロウリヤだった。皆が憧れ恋焦がれる人物だが、ゼストの婚約者候補筆頭で、英雄の家系である生粋のお嬢様なので、ウリドからしたら高嶺の花なのだ。
燃え上がるような美しい赤髪を靡かせて笑顔でこちらに歩いてくる絶世の美女を見て、硬直してしまうウリド。
「……惚れまちたね」
アリアナが呟くと子竜達も頷く。
「ロウリヤしゃん、こんちはでしゅ！」
アリアナが手を振り返す。
「いや、もう夕方よ？　心配だから送って……ってこの方は？」
ウリドに気付いたロウリヤ。

「ああ、やぼーの師匠でしゅ！」
「また何か始めたのね！」
アリアナの言葉に目を輝かせるロウリヤ。
「はっ！　あ……俺は……ウリボでしゅ……はっ！」
噛み噛みになってしまい恥ずかしそうに顔を真っ赤にするウリド。
「ウ・リ・ドでしゅよね？」
呆れるアリアナに、そんなウリドを見て笑うロウリヤと子竜達。
そして、この微笑ましい光景を物陰から憎しみの目で見つめる者達がいたが、誰も気付いていなかった。
ウリドにとって夢のようなロウリヤとの時間は、アリアナが心配で迎えに来た族長ゼストの登場ですぐに終わりを迎えた。
今目の前にいるロウリヤやゼストは、アリアナという幼子と出会わなければ一生関わることのなかった雲の上の人達だ。
そう思うと、何故か自分が酷くちっぽけに思えて、ウリドは乾いたような笑顔しか浮かべられない。
（ロウリヤ様と族長か……お似合いだな。俺なんて見向きもされないよな）
仲睦まじく話すゼストとロウリヤを見て落ち込むウリドに気付いたアリアナ。

立ち読みサンプル
はここまで

「ウリボしゃん、頑張れ！」
「はぁ……ウリドだ」
幼子に励まされ更に落ち込むウリド。
「ウリボ、こいつが迷惑かけたな」
ゼストがウリドに近寄り挨拶する。
「は、はぁ……」
この親子、わざとか？　と思わずにいられないウリドであった。

その夜ウリドは色々と考え込んでいたので、一睡も出来ずに朝を迎えることになった。
そして目の下にクマを作ったままフラフラと起き上がった時のこと。
ふと畑の方から気配がするのに気付いたウリドは、また幼子の襲来かと急いで外に出た。
だがそこにいたのは、数人の見覚えのない男達だった。
「何者だ？」
ウリドは見知らぬ男達を警戒して睨み付ける。
「ああ、ここの畑の主か？」
そう言ってヘラヘラと笑う男達の足元には、衝撃の光景が広がっていた。
昨日あの幼子達が一生懸命作った小さな畑が、見るも無惨に破壊されていたのだ。犯人は目の前